

■社会教育委員 日々の活動紹介■

「こども達と野外活動とスキー」

舟橋優子

市民スキー講習会の講師として活動していた頃、グレンデには子どもの姿はほとんどなく、大人のスキーヤーばかりでした。子ども達にもスキーを教えたいから一緒にやりましょうということになり、当時の体育課の強力なバックアップをいただき、スキースポーツ少年団（略してスキスポ）が発足しました。それから40年近い月日を、スキスポの子ども達と過ごしてきました。

体力作りを兼ねて1年を通してハイキングや海合宿、アスレチック、山登り等の野外活動をして、スキーシーズンに入るようにしています。休みの日に子ども達のために時間を作って活動に参加してくれる講師、それに活動のお手伝いに力をかけてくださる保護者、役員の方々の協力でこれまで活動してこられたと思ひ感謝でいっぱいです。

最初は子ども達のお母さん代わりでしたが、今ではおばあちゃん代わりになってしまいました…。最近では山登りではいつの間にか1番後ろになってしまいうし、子ども達の成長の早さに置いていかれがみです。

大変なことも多いですが、子ども達の笑顔からエネルギーをもらって活動しており、この時期は合宿の手配、バスの手配に追われている毎日ですが、子ども達の思い出作りのため頑張ろうと思います。



スキスポの活動の様子

「こんなきれいな街に住んでいたんだ」

光田剛

私は5年ほど前まで武蔵野市の市民でした。ただ、その頃は、勤務先の成蹊大学と市内の自宅とを往復する日々を繰り返していただけでした。そして、いよいよ転出の日、手続きに武蔵野市役所に来て、8階のカフェ・ル・ブレ（ハチカフェ）にはじめて伺い、その窓から武蔵野市を一望し、「ああ、こんなきれいなところに自分は住んでいたんだな」と感じました。引っ越しの感傷も手伝って、でしょうか、その日に感じたことが、いまにつながる武蔵野市との「出会い」であったと思います。

その後、成蹊大学で行われた武蔵野市寄付講座「中国を理解する」のコーディネーターを務めさせていただき、この際には市役所や武蔵野プレイスの方々にお世話になりました。後にこのシリーズは拙編『現代中国入門』（ちくま新書）として書籍化され、このときも武蔵野プレイスの方に紹介の労を執っていただきました。

現在、私は、成蹊大学ボランティア支援センター所長の職にあり、また、国連の定めた「持続可能な開発目標」SDGsの教育・研究を担当する成蹊学園サステナビリティ教育研究センターの所員も兼任しています。ボランティアもSDGsも私の専門からは遠い領域で、毎日勉強させてもらいながら仕事をしているという実情です。社会教育についてもそれは同じです。是非ともよろしくお願い申し上げます。

■図書館で見つけた！ 社会教育委員イチオシの本■

『生涯一書生』 谷川徹三（1988年） 岩波書店

本書には、著者の哲学者である谷川徹三が「生涯一書生をもって身を律してきた私」の本音としての7本の論考が収録されています。「私の道元」「世界連邦政府運動と世界憲法」「天皇制の在り方について」「世界の中の日本芸術」「宮澤賢治」「文化の基本構造について」「核時代のモラル」の7つのテーマです。

本書が出版された1988年は、1895年生まれの谷川が93歳の時であるから、まさに人生百年を生きた碩学が残した遺言の書と言っても過言ではないでしょう。谷川の「生涯一書生」に徹したさすがさが、本書の読者を限りなく魅了します。（宇佐見義尚）



問い合わせ先：武蔵野市教育委員会教育部生涯学習スポーツ課

☎0422-60-1902

✉ sec-syougaku@city.musashino.lg.jp

こもれび 武蔵野市社会教育委員だより

発行日：令和2年2月1日

編集：社会教育委員の会議

発行者：武蔵野市教育委員会

市ホームページではカラー版が

ご覧になれます（右記QRコードから）



武蔵野市社会教育委員だより

令和2年2月1日 第7号

管外研修

「社会教育委員のための管外研修が、令和元年9月24日に6名の社会教育委員と教育委員2名の参加を得て、本年度は神奈川県の大和市と横浜市で行われました。

(1) 神奈川県大和市が誇る「文化創造拠点シリウス」の成功に学ぶ

大和市（人口23万人）の「文化創造拠点シリウス」は、平成28年11月3日に「未来にわたって光り輝き、市民に愛される施設となるように」との思いで「おおいぬ座」の恒星シリウスからその名をとった大規模複合文化施設です。地下1階（駐車・駐輪場）地上6階のビルに、「やまと芸術文化ホール」（1,007席）「大和市立図書館」「大和市生涯学習センター」「大和市屋内子ども広場」の4施設が入り、加えて大和市役所大和連絡所、大和市イベント観光協会、市民交流ラウンジなどが同居することで、その運営の斬新さや利用者本位の様々な工夫によって、さらに立地の利便性（大和駅徒歩3分）もあってか、常時、多くの活発な利用者を得ている施設です。

年間来館者数は、開館1年後に300万人を超え、3年目となる今年は、我々が訪問する前日の9月23日に累計来館者がちょうど900万人を突破したとのこと。一般に「箱もの」はそのコストパフォーマンスの観点から批判されることが多いのですが、これほどの利用者数を誇る施設であれば、納税者としても十分に納得のいくというものです。大和市職員や運営主体である指定管理者「やまとみらい」の職員は、利用者のさらなる満足度向上のために、施設建物の構造や運営上の現状や課題をよく分析し、設置3年目にしておお一つひとつ具体的に改善していこうとする情熱に溢れており、その飽くなき向上心に対して強く感銘を受けました。また、施設の建築費や運営費の調達に関しては、複合施設にすることにより、それぞれの分野からの補助金・助成金をフルに利用しながら効率的に賄うことが出来ているとのことで、この点、目からうろこが落ちるようでした。ちなみに、この「シリウス」の設置構想にあたり、我らの「武蔵野プレイス」を大いに参考にしたと聞き、内心、嬉しくなると同時に、「負けてはいられない、我らもまたさらに向上していかなければ」と、強烈な刺激を受けた今回の「管外研修」でした。

（宇佐見義尚）

(2) 横浜美術館見学によって得られたもの

横浜美術館開館30周年を記念する、オランジュリー美術館所蔵品の「オランジュリー美術館コレクション ルノワールとパリに恋した12人の画家たち」を観てきました。ルノワール！ シスレー！ モネ！ セザンヌ！ ルソー！ マティス！ ピカソ！ モディリアーニ！ ヴァン・ドンゲン！ ドラン！ ローランサン！ ユトリロ！ スーティン！ あまり絵画に詳しくなくても、なにかしら、どこかしらで聞いたことのある「名前」たち。19世紀後半から20世紀初頭のフランス美術に新しいスタイルを確立させていった13人の巨匠たちです。喫茶店名でも、雑誌名でもないけれど、確かに一度は観たことのある作品、その本物に出会うことができました。それらは画商である「ポール・ギョーム」のコレクションの数々。モディリアーニやスーティンら当時は評価が確立していなかった画家たちも積極的に支援したその画商と、ギョーム夫人「ドメニカ」にまつわるミステリアスな物語も、当時の活気あふれるフランス美術界をうかがい知ることができて、とても充実したものでした。今回、社会教育委員だけでなく教育委員のお二人とも一緒にまわることができ、「あの絵いいですね」「ぼく、あれ好きです」なんて、観終わったあとのバスの中の会話ははずみ、とても有意義な研修だったと思います。改めて、美術館の果たす社会教育的役割とは何かについて深く考えさせられました。（秋山聡）



シリウスの正面入り口



シリウス内部

全国社会教育研究大会兵庫大会

※全文は市ホームページに掲載しています

令和元年10月24日から25日にかけて、神戸ポートピアホールで開催された全国社会教育研究大会に、社会教育委員4名で参加してきました。大会スローガンは「『学びと実践の収穫祭』 ごこく豊穰 in 兵庫」、研究主題は「多様性を認め合う、豊かな地域社会のための社会教育の実践」というものです。初日は映画「スウィングガールズ」のモデルにもなった兵庫県立高砂高等学校ジャズバンド部「Big Friendly Jazz Orchestra」の華やかな演奏から始まります。そのままずっと聴いていたくなるような演奏でしたが、それに続いた平田オリザ氏による記念講演も印象深いものでした。社会教育の役割を模索していた最近の流れを断ち切り、社会教育は学校教育の付け足しではない、むしろ、社会教育はこれからの時代に求められている学校教育の質を変革させていく根幹なのだという主張をされます。このことは、文化活動の活性を支援し、交流の場を広げようとする社会教育委員、自治体の職員、すべてに気づきを促し、エールを送る内容でした。

講演に続いて、シンポジウム「時代潮流の変化の中で多様な地域特性を活かし、高めあう社会教育」が開催され、朴木佳緒留氏（兵庫県社会教育委員）をコーディネーターとして5名のシンポジストが課題を指摘します。地域社会の豊かさとは何かというフロアからの質問に対して、パネリストから「ここにいて良かったと思えること、相手の喜びを自分の幸せと感じられること」という返答がありました。

翌日25日の分科会で一緒した古谷哲矢氏（相模原市社会教育委員）とは、報告書の交換を約束して別れたのですが、早々に的確なまとめをされた報告書をお送り頂き、改めて私の記憶から抜け落ちていた視点(上記傍線部分)をここに加えることができました。ありがとうございます。異なる視点を交換し合う地域交流の実例になりました。このような細いネットワークを離れた地域を互いに見守り合うネットワークに育てていけば、毎年、全国大会に出席する意義は大きいのだと思います。これらの糸が細くなっていないか、たぐり寄せる活動に社会教育も参加できるのだと考えています。(板垣文彦)

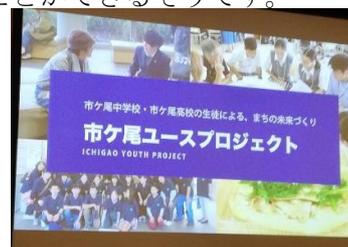
関東甲信越静岡社会教育研究大会埼玉大会

令和元年11月7日(木)～8日(金)に「ウエスタ川越」で開催され、武蔵野市からは社会教育委員5名と担当職員1名が参加しました。大会スローガンは「今、時代が変わる 人が変わる そして社会が変わる！」で、研究主題は「あなたはどうか生きる？ 人生100年時代！」でした。

第1日目は全体会。第2日目は分科会で「社会教育の担い手としてのあり方」「人生100年時代における社会教育の実践」「市民と行政のパートナーシップ」「人材発掘、養成、フォローアップのあり方」「社会教育のネットワークづくり」の5分科会に分かれ、それぞれに事例発表やグループ協議が行われました。私が参加した第2分科会では、以下の2つの事例発表がありました。

1つ目は、千葉県浦安市「浦安想い出語りの会」で「回想法」という米国の精神科医ロバート・バトラーが1963年に提唱した心理療法を活用した実践事例です。集まった人達が懐かしい思い出を語り合うことで日々の生活に活気を取り戻し、脳の機能を活性化すると同時に明日からの毎日を意味あるものとする力になるというものです。脳の活動を助けることが、認知症をもその症状を遅らせることができるそうです。

2つ目は、横浜市青葉区「市が尾ユースプロジェクト」の事例で、大人と中高生が一緒になってまちの課題や魅力アップに取り組むことで多世代間交流を図り、子ども・若者の育成支援を行う活動です。青葉区子ども家庭支援課の事業として2017年にスタートし、いろいろな団体のサポートもあり、現在5～6のチームに分かれ中高生がテーマを決め計画を立て実践しています。「今まで住んでいた住民と新しく来た住民とを繋ぐ役目が出来ると良い」と話されていました。(北村淳子)



事例発表

東京都市町村社会教育委員連絡協議会の活動

他を知ることとはとっても大事！ ～交流大会・研修会～

社会教育委員には「東京都市町村社会教育委員連絡協議会」があります。そして年に一回、多摩地区の各市町で「交流大会・研修会」を行います。昨年度は武蔵野市が担当で、今年度が三鷹市。果たして令和元年12月14日、お隣の三鷹市公会堂で“学びと活動～「つながり」と「地域課題の解決」を促す社会教育の推進”をテーマに、各ブロックの現地発表、参加型で学ぶことのできる研修会などが行われ、そちらに参加してきました。

第一部。各市町を五つに別けた各ブロックの幹事が壇上で報告をします。なかでも個人的には各地域のそれぞれの「地域コミュニティ」との関わりに注目しました。「地域社会の再生」「地域コミュニティの活性化」は昨今様々なところでとりあげられている課題です。そうした部分にこそ社会教育というものが、いま求められているのかもしれない。地域の特産品（国分寺市の場合、古代赤米）／地域リソースを活用しているところや、学校教育に対してよりコミットを進めているところなど各市町いろいろな実施報告がありましたが根底には共通した思い、目標がありました。得てして「社会教育」というものの守備範囲は広いものですから、漠然となりがちの部分も無くは無く、そうした面を考えても他を知りことはじつに意義があります。武蔵野市の場合、「教育委員との交流」などは他地域と比べても特記すべき部分でもあると思いますので、今後はさらにすすめ、PTAや青少協などの既存の地域団体とも積極的な意見交換などあってもいいのではないかと感じました。ちなみにこれは「交流大会・研修会」後の懇親会で三鷹市の社会教育委員さんに言われたのですが、武蔵野市の活動のひとつ「こもれび」の発行に注目されているそうです。なるほど、内にいるとわからない面も外からの意見で、あらためて自分たちの活動をふりかえることもできました。この「こもれび」で自分たちの活動を、アピールし、社会教育とは……ということも多くの方々に楽しく発信していけたらと思います。

第二部は、「日本の伝統文化 能の世界を楽しむ ～能を見て 謡を体験しよう～」。講師に梅若万三郎家を支える青木家の、青木一郎さんをお呼びして実際に「謡（うたい）」を体験したりすることもできました。じつは、青木さんは吉祥寺に在住する能楽師なのですが、地域活動にも積極的な方で、コミュニティセンターの委員や、本宿地区の盆踊り、青少年問題協議会、かつてはPTAなどにも参加されています……と言いますか、私自身以前から青木さんは存じていたのですが、まさか舞台上の青木さんが「あの青木さん！」とは全く知らず……。 「えー！青木さんって能楽師だったの！ コミセンのおじさんだと思ってた！」 「なんでコミセンの青木さんいるの？」と（笑）。 「あらら、青木さん、舞台上がっちゃったよ」と思ったら、じつに素晴らしい「本業」の姿を見ることができ感激……と同時に驚きも（笑）。地域貢献と本業との兼ね合い、そうしたものへの青木さんの考え方も講演のなかでお話しされていましたが、青木さんにとっての地域活動とは「こどもたちのふるさとづくり」であるとのこと。さらに昨今の「働き方改革」の中で注目されている「ワークライフバランス」に関する質問もあり、基本的には「ワークはワーク」であり「ライフはライフ」、そのふたつが充実し時にリンクすることは自分自身の人生が豊かになるのです、といった内容のお話もありました。まさに自ら体現する青木さん。たいへんに参考になりました。（秋山聡）

第5ブロック研修会

令和元年11月24日に調布市主催による第5ブロック研修会に参加して参りました。

都市社連協の統一テーマである、学びと活動の循環をつくる～『つながり』と『地域課題の解決』を促す社会教育の推進～のもと今回の研修テーマに「市民参加演劇で不登校問題を考える」と掲げ「トシドンの放課後」という文字通り演劇にて不登校問題を考えるという斬新かつ工夫を凝らした設えをして頂きました。ただの講演やディベートだけでは伝わらない、生に近い演劇という手法を使うことにより、より具体的に問題に対して向き合っていきたいという調布市社会教育委員の考えでこの研修会を演劇にしようと思ったそうです。クライマックスでは涙する方が多くいたことに象徴されるようによりリアルな現実が垣間見え素晴らしい設えとなりました。「不登校」と一言で括ってもその背景や要因は非常に複雑で誰一人同じ状況ではないということ把握するべきで演劇後の全体討議ではどのような状況が子ども達をこの状況に追い込んでしまっているのか各市の現状も踏まえて熱い討議がなされました。多くの市から子どもたちの「居場所」が減っているのもひとつの要因ではないかという意見があがりました。今の子どもたちを取り巻く環境は学校と家庭、放課後は習い事や塾といった居場所が限定されているので追いつめられると行く場所がなくなっているのではないかという話がありました。家庭と学校、閉鎖された社会以外の「居場所」が子どもたちには必要なのではないかと考えさせられた第5ブロック研修会でした。（堀内雄次郎）